

NO.218 3月号

FOREST NEWS

未来を育てる木を植える
未来を守る木を植える



2026年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会 発行人 藤生輝彦

〒182-0021

東京都調布市調布ヶ丘2-15-1ビリアベルデ407号

TEL:042-449-0183

ホームページ <http://midori.mond.jp/>



01

理事長メッセージ



環境問題に少しでも関心のある者なら一度は訪れてみたい エコロジーの聖地《モンテベルデ自然保護区》

軍隊を捨て、環境を選んだ平和国家

コスタリカは1949年、憲法で「常備軍を恒久的に廃止」した珍しい国です。それまでの軍事費のすべてを環境保全、教育、医療に充てる方針へ大転換、軍隊を持たない文字通りの平和国家としてスタートしました。現在、地球環境問題が危機に陥っていることを思えば、日本はじめ諸外国のはるか先を行っている国といえるでしょう。コスタリカは中米に位置し、カリブ海と太平洋の2つの大洋に囲まれた小さな国です。国名もそこに由来していて、「コスタ」はスペイン語で「海岸」、「リカ」はリッチ、つまり「豊か」という意味です。この国の人々は気候・風土に恵まれた自国の自然環境を守るため、今から70年も前に軍事力を放棄したのです。

豊かな生態系の象徴「雲霧林」と幻の美鳥

その豊かな自然を象徴するのがモンテベルデ自然保護区の「雲霧林」(cloud forest)です。雲霧林とは年中雲や霧に覆われた高湿度の森のことで、生物多様性がとても高いのが特徴です。そのため世界中から多くのエコツアー客がやってきます。そのお目当ては“世界最美の鳥”といわれるケツァール(和名カザリキヌバネドリ)です。この鳥はすでに絶滅危惧種に指定され、現在100羽ほどが雲霧林の中で厳重に保護されています。

環境先進国への大転換の裏にあった苦い経験

ちなみに、コスタリカも初めから環境先進国だったわけではありません。国の主産業であるコーヒーの生産量を大幅に高める目的で、大規模な森林伐採を行ない、国土の生態系を崩壊寸前にまで至らしめるという苦い経験を持っているのです。その大失敗を契機に国策を大転換せざるを得なかったわけです。

読者の皆様へ 忘れられないエコツアーのすすめ

この際、『フォレストニュース』愛読者の皆様に、エコツアー客の一人となってモンテベルデ自然保護区を体験されることをお勧めします。地球環境問題のみならず、きっと生涯最高の忘れられない旅になるでしょう。





1000本達成記念 坂田の森植樹祭に参加してきました

5年間の集大成！1000本達成記念植樹祭

3月14日（土）、平塚市吉沢の1000本達成記念植樹祭が開催されました。5年間コツコツと続けられてきた植樹活動が、1000本という大きな節目を迎えた記念すべき日です。当法人からも7名が参加し、一緒に木を植えてきました。

災害に強い森を目指す「宮脇方式」

この植栽地は、農園主の親戚のご厚意で許可をいただき植樹させてもらいました。森づくりには、その土地本来の樹種を複数混ぜて密植し、災害に強い自然な森を早期に再生する「宮脇方式」が採用されています。

我が子のように育てられた苗木と参加者の笑顔

今回植えた苗木は、「湘南1000年の杜倶楽部」代表の原さんが、地元のどんぐりを拾い集め、3～4年かけて育て上げたものです。近年の猛暑の中での水やりは過酷を極め、枯れてしまう苗もある中で、懸命に守り抜かれました。原さんは「我が子のように育てた苗木。もう親のような気持ちですよ。今日は苗木の卒業式であり、同時に入学式だ」と語られており、その言葉に込められた深い愛情に胸を打たれました。当日は、東京や千葉から、年齢も背景も違う人々が、シャベルを手に協力し合いながら一本一本丁寧に植え付けました。作業を終えた後の皆さんの充実した笑顔が、この活動のすばらしさを物語っていました。

体験を通して学んだ「本当の環境保護」

地球上に4000万本の木を植えた故・宮脇昭先生は、「植樹とは、明日を植えること、いのちを植えること、そして心に木を植えることなのです」という言葉を残されています。本当の環境保護とは、ただ理屈で考えるだけでなく、実際に自然に触れ、生態系を知り、自らの手で自然を育み愛することから始まるのだと、今回の体験を通して強く実感しました。

森づくりはここから。 関係者への感謝と今後の誓い

1000本の植樹は大きな達成ですが、森づくりはここからがスタートです。土地を提供してくださったご主人、苗を育ててくださった原さん、そして全ての関係者の方々に心から感謝申し上げます。私たち緑の会も、今回心に植えられた木を大切に、今後もこの森の成長を共に見守り続けていきたいと思えます。



03

特別インタビュー



船橋支部 伊藤由美子さんに聞く！ 小巻ファーム植樹体験で見つけた「自然の繋がり」

今回は、先日小巻ファームでの植樹活動に参加された伊藤さんに、
現地での体験やそこで得た学びについてお話を伺いました。

—小巻ファームを訪問されたのは今回が2回目とのことですが、植樹体験はいかがでしたか？

伊藤さん：小巻ファームに行くのは2回目ですが、実際に植樹をしたのは今回が初めてでした。他の場所での植樹と比べると、非常に自由で大らかな雰囲気だったのが印象的です。また、宮脇方式に基づいた多種多様な苗木が用意されていたのですが、それをすべて原さんが一人で何年もかけて育てていたと知って本当に驚きました。「私もあんな風に、いろんな種類の苗木作りに挑戦してみたい！」と強く刺激を受けました。

—現地では、小巻さんの旦那様から貴重なお話を伺ったそうですね。

伊藤さん：はい、特に「土作り」と「自然の循環」のお話が心に響きました。例えば、タブノキにはその木にしかつかない虫やバクテリアがいるそうです。多様な木があることで、森全体の栄養バランスが保たれているんですね。落ち葉を使って5年サイクルで土を育てるというお話も素晴らしかったです。さらに、木を植えて水脈ができると、山で蓄えられた栄養が川を下って海へ流れ、プランクトンを増やして魚を育む……。山と海が深く繋がっていることを改めて実感しました。

—ご自身の土作りについても相談されたとか？

伊藤さん：そうなんです。自宅で生ゴミから土を作っているのですが、コーヒーの粉を入れすぎてしまって、植物が育ちにくい土になってしまったんです。そのことを相談すると、「山の土を敷いて、自分が作った土を乗せ、さらに山から持ってきた落ち葉を被せて1ヶ月放置するといい」と教えていただきました。バクテリアが増えて良い土に生まれ変わるそうなので、今度小巻ファームへ行った際に山の土をいただいてきて、ぜひ実践してみたいと思っています。

—今回の学びを、今後の「船橋支部」の活動にどう活かしていきたいですか？

伊藤さん：まずは、原さんが作られていたような多様な種類の苗木作りに、船橋支部でも挑戦してみたいです。写真にも収めてきたので、ぜひ真似してみたいですね。また、小巻さんの旦那様のお話は本当に引き出しが多くて面白かったので、9月に予定しているボランティアセミナーなどで、講師としてお招きして勉強会を開けたらいいなと考えています。

—自然の循環から身近な土作りまで、大変実りある体験だったんですね。
伊藤さん、ありがとうございました！